

ジャックと豆の木

大分大学教育学部附属幼稚園（文責／園長 石川照代）



愛しい我が子を守れるのは？

目の前で子どもが車に跳ねられるようなことがあったら・・・それがウチの幼稚園の子だったら・・・想像するだけで身の毛がよだつ思いです。

これまで私は、親の同伴による登降園ということで、交通事故など起きるはずがないと完全に安心していました。でも、あるはずのないことが「ある」のが世の常です。実際にはヒヤリとただけで、事故には至りませんでしたが、自分の認識を改めるには十分な出来事があったのです。即日、登園時の指導方針を立て、職員を通して保護者の方々にも伝えさせました。そして翌日から、積極的に横断歩道の渡り方について声を掛けています。

すると、新たな問題点も見えてきました。「歩行訓練」の指導を受けて一週間も経っていないのに、こちらが声を掛けなければ、停止の動作をせずに渡ろうとする子どもが多かったです。訓練が訓練に終わっているということです。これは極めて危険な兆候です。時と場合によって行動を使い分けていることになります。交通安全に限らず、これで本当に危険が迫ったときに、自分の命を自分で守るための行動が取れるのだろうか心配になりました。

登園指導での私の目標は1つです。全ての子どもに「横断歩道を渡る時には必ず止まり、左右確認をして、落ち着いて渡る『力』を身につけさせる」です。「力」というのは、いつでもどこでも、自分一人でもできる状態のことを言います。それができなければ、大事な子どもたちの命を守ることは不可能だからです。

私の「ただならぬ様子」を察して、しっかり子どもを停止させ、確認動作をさせてくださる保護者の方が増えてきました。お願いです。年長さんは、その場で子どもの手を離して構いませんから、「一人でもできる」ことを目指してください。年中さんは、言葉で促しても構いませんが、自分の意思で停止し、確認動作がスムーズにできるよう「師弟同行」スタイルでいきましょう。年少さんは、とにかく横断歩道で「停止する」ことが「癖」になるようにしてほしいと思います。

そして、最も大事なものは、これを園外の横断場面でも子どもにさせられるかということです。子どもたちは親を見ています。これがきっと世に言う「親力」に当たるものなのだろうと思います。

愛しい我が子を守れるのは・・・親だけです。



り援ま言けたのき山 こ援テ
良難をすにて。た`あ二とを1一
いう頂。`頂まめ各り学に頂プ三
おごい教担いたと学期`きを六
年ざた育任た`は年しは今な切名
をい全ははと担言毎た、`がり全
おまて、`と聞任えの。`お心らまて
を迎えのそていた`行運家から、し
えた。皆うもてちと事動の健た子
く。様い勇いにてや会方安や。ど
だ来、う気まもも保を々々堵か保も
さ年、`仕づす`丁育ははに命者
い。`心事け。`先寧参じおいてい
。`よりでら私生に加め力命のが
ど、`うすれも頑関な、`添す。何方、
`ぞ感。`ま同張わど園え。と々ニ
宜謝ですじつ、`内頂。かの学
しく申す。`て子清く守温期
お上らネた。`きも、`面ぬいゴ
願げ、`ルがとまた餅がけご
長いま陰ギ、`温しちつ沢た支ル
いすに1そか
石た。`日がのい
川し本向湧た言
照ま当にいつ葉
代すにごてたを
。`有支き一か



二学期の取組への温かいご支援
有り難うございました。

元気な赤ちゃんを！

養護教諭の今吉先生が、産休に入ります。子どもたちは「めぐみ先生！」と呼んで怪我をしたときや気分の悪いとき、とても頼りにしていました。また、自らを生きた教材として、命の尊さを子どもたちに伝える保育をしてくださいました。少し寂しくなりますが、今吉先生が元気な赤ちゃんを産んで、戻ってきてくれることを楽しみに待ちたいと思います。



「めぐみ先生頑張ってね！」

3学期は、新しい養護教諭の先生が来てくれます。